

# 入賞

住宅の部

～熱的境界の再定義により、民家改修の現代的課題を照射する家～

## 部分断熱の家

建築主：T氏  
設計：中川 純+戸邊 亮司+永井 拓生  
+ 冨山 正幸+深和 佑太  
施工：シグマ建設株式会社  
所在地：野田市



ダイニング(断熱空間)からリビング、和室、縁側(非断熱空間)を見通す。熱的境界面はLow-eガラス(断熱)を用いた木製建具。温熱環境の差異を内包するレイヤー空間。熱的な差異に応じて主体的に住まい方が変化する。

日本家屋の現代的な再構築への試みである。改修コストの観点から全面的断熱改修を選択せず、居住者の利用実態をみすえて熱的境界をいかに設定するかは現代的課題といえる。本計画では居住者内でも様相が異なり、一人は古民家の保存活用を希望し、一人は都市部のマンションのような空間を求めたという。そういう意味で単なる部分断熱の話にとどまらず、古材とクロスがどのように共存しうるかという様式的折衝の実践である点もユニークである。また実測調査や分析を行い、時期に応じて快適性を損なわず生活する方法を論理的に提示しているのも大きな成果といえる。

一方で審査を通じて部分断熱そのものの是非は議論となった。また格式を担保するヴォイド空間において、天井を撤去してSUSワイヤーを露出させた意匠性やグレアの強い照明計画など、伝統的建築様式への所作に疑義が生じた。

これらの議論の決着は容易ではないからこそ本質的である。僕自身の勝手な見立てであるが、季節で生活領域が変わる豊かさのより具体的な提示(改修コストとは異なる価値基準の構築)や、ほぼ半屋外のような環境となるヴォイド空間と庭との一体的な活用方法はあるか(屋外と割り切ることによる計画学的な発明)、または熱的に開かれた(閉じた)内部を保有するからこそできる近隣への開き方(近隣への緩衝帯としての非断熱領域)などにヒントがあるかもしれないと、今回の審査を通じて考えている。(海法 圭)



南の庭から縁側を見る。約100年前の大工仕事による設えを継承し、現代的な手法で日本家屋を再構築した。南面に拡幅された廊下を丁寧に解体し、基礎を新たに設けて復元した。木製建具はシングルガラスを採用。

(撮影全て:Takeshi Yamagishi)

### 選考の基準

次の事項を選考の基準とし、総合的に審査します。

- デザイン性に優れていること
- 安全で快適な建築空間を創出していること
- 防災への配慮がなされていること
- その他、独自の取組や提案がなされていること
- まちなみや周辺の景観と調和がとれていること
- 環境負荷の低減に配慮していること
- 施工上優れていること

※建築基準法等の諸法令に適合しており、かつ近隣等との紛争が生じていないこと等も含む。

### 第31回千葉県建築文化賞検討会議

【敬称略 委員は五十音順】

委員長 岡部 明子：東京大学大学院教授

委員 海法 圭：建築家

副委員長 岩村 和夫：東京都市大学名誉教授  
(～令和6年11月1日)

委員 加藤 未佳：日本大学教授

委員 久富 清敏：一般社団法人千葉県建築士会会長

委員 藤本 香：環境デザイナー、千葉大学特任教授

第31回千葉県建築文化賞に御応募いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。  
応募総数56点の中から最優秀賞2点、優秀賞2点及び入賞5点の、合わせて9点が選定されましたが、応募作品はいずれも優れた特徴をもった質の高い作品でした。  
作品に携わられた皆様に敬意を表し、今後ますますの御活躍を期待しております。

千葉県建築文化賞検討会議事務局

